「軽み」研究文献一覧(下)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 露口, 香代子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4670

「軽み」研究文献一覧（下）

露口香代子

本稿は「会報大阪俳文学研究会」第42号（平成20年10月）の拙稿『「軽み」研究文献一覧（上）』の続稿で、凡例も（上）に準ずるものとする。

昭和50年（1975）

○復本一郎「189・蕉風俳諧の美学」『日本古典文学史の基礎知識』（有斐閣ブックス）四五二頁（二）

○山下一海「芭蕉の『かるみ』をめぐって」国文学ノート13（三）／『芭蕉の論』昭和51年

○乾裕幸「『阿羅野』の時代」俳文芸6（十二）／『ことばの内なる芭蕉―あるいは芭蕉の言語と俳諧性』（昭和56年）で加筆「『阿羅野』の時代―《正風体》の確立」

昭和51年（1976）

○高橋慶子「軽みと芭蕉の連句(11)―恋の句と軽み」道20(1)（一）

○富山奏「芭蕉の高悟帰俗の心の具体像―元禄三年の発句を中心として―」連歌俳諧研究50（二）／『異端の俳諧師 芭蕉の藝境』平成3年

○中島斌雄「軽み試論―『去来抄』における『おちつきとおもみ』『即興・感偶』をめぐって―」日本女子大学紀要・文学部25（三）

○乾裕幸「俳言・芭蕉と日常の世界」解釈と鑑賞（特集・松尾芭蕉―言語とイメージ）（三）

○島津忠夫「雅語・芭蕉と和歌連歌の世界」解釈と鑑賞（特集・松尾芭蕉―言語とイメージ）（三）

○松林尚志「芭蕉・発句の世界 触覚表現」解釈と鑑賞（特集・松尾芭蕉―言語とイメージ）（三）

○尾形仂（司会）・堀信夫・那珂太郎・山本健吉「第三章、芭蕉の俳諧理念」『芭蕉―シンポジウム日本文学8』（学生社）昭和49年7月7日の第三回討議（五）

○富山奏「かるみ」『日本文学における 美の構造』（雄山閣）（五）／『異端の俳諧師 芭蕉の藝境』平成3年

○復本一郎「あだ」『日本文学における 美の構造』（雄山閣）（五）

○上野洋三　「元禄堂上歌論の到達点―聞書の世界」国語国文45(8)
(八)／『元禄和歌史の基礎構築』平成15年
○富山奏　「芭蕉の『軽み』唱導の実態―その書簡を介しての考察」『俳諧攷』(島居清華甲記念論文集)(九)／『異端の俳諧師　芭蕉の藝境』平成3年

昭和52年(1977)

○山本健吉　「軽みと重みと―芭蕉・西行・朔太郎」新潮　(一)／『漂泊と思郷と』昭和55年、『全集』8
○井本農一　「二十、新しみの追究」『芭蕉入門』(講談社学術文庫)(二)
○阿部完市　「『軽み』私論」『芭蕉へ●芭蕉をどう読むか』(ぬ書房)(三)
○乾裕幸　「芭蕉の言語と俳諧性」『芭蕉へ●芭蕉をどう読むか』(ぬ書房)(三)／『ことばの内なる芭蕉―あるいは芭蕉の言語と俳諧性』昭和56年
○櫻井武次郎　「〈不易流行〉論序説」『芭蕉へ●芭蕉をどう読むか』(ぬ書房)(三)／『奥の細道の研究』平成14年
○高橋庄次　「『あら野』論―その〈模様〉と〈軽み〉志向」国文学22(5)(四)／『芭蕉連作詩篇の研究　日本連作詩歌史序説』(笠間書院)昭和54年
○乾裕幸　「取合せの論」国文学22(5)(四)／『ことばの内なる芭蕉―あるいは芭蕉の言語と俳諧性』(昭和56年)で補完「《取合せ》の論」
○大内初夫　「『猿蓑』論」国文学22(5)(四)／『俳林逍遙―芭蕉・去来・諸九尼』昭和59年
○復本一郎　「『俳諧深川』論」国文学22(5)(四)
○米谷巌　「『俳諧別座鋪』論」国文学22(5)(四)
○島居清　「『すみたはら』論」国文学22(5)(四)
○堀切実　「『続猿蓑』論」国文学22(5)(四)
○松尾靖秋　「かるみ」の項『俳句辞典・近世』(桜楓社)(五)
○大内初夫　「59・『炭俵』の世界―梅が香にのつと日の出る山路かな―」『芭蕉物語　焦風の《人と詩》の全体像をさぐる』(有斐閣ブックス)(六)
○尾形仂　「不玉宛去来論書」『鑑賞　第33巻　日本古典文学俳句・俳論』(角川書店)三四〇～三四九頁　(十)
○山下登喜子　「芭蕉『かるみ』の生成」関東学院女子短大論叢58(十)／『蕉門俳諧論考』平成元年
○稲垣安伸　「高悟帰俗―『ささめごと』と蕉風の言説」高知日本文学研究15　(十二)

昭和53年(1978)

○富山奏　「解説―蕉風俳諧の『軽み』」『新潮日本古典集成　芭蕉文集』三三一～三六五頁　(三)
○尾形仂　「『軽み』への道」『芭蕉の世界』上・下(放送ライブラリー19・20)(五・六)／『芭蕉の世界』(講談社学術文庫)昭和63年
○山下登喜子　「連句における芭蕉の『かるみ』」国文学研究65(六)／『蕉門俳諧論考』平成元年

○中村俊定（監修）「かるみ」（Ⅳ俳論）『芭蕉事典』（春秋社）二三七～二三八頁（六）
○尾形仂「Ⅸ軽みへ」『松尾芭蕉 詩心に生きた漂泊の俳人』（日本を創った人びと18、平凡社）（八）
○山本健吉「反『軽み』論の氾濫」東京新聞（9月28日付）（九）／『漂泊と思郷と』昭和55年、『全集』8
○乾裕幸「《かかり》と《かるみ》―『ひさご』序説―」『芭蕉・蕉村・一茶』（栗山理一編、雄山閣）（十）／『ことばの内なる芭蕉―あるいは芭蕉の言語と俳諧性』（昭和56年）で補正論「『ひさご』序説―《かかり》と《かるみ》」

昭和54年（1979）

○復本一郎「擬声語・擬態語と俳句―芭蕉を中心に―」自鳴鐘（一）／『笑いと謎―俳諧から俳句へ―』（角川選書）昭和59年
○高橋庄次「第二章、Ⅳ最初の〈軽み〉撰集『あら野』・Ⅴ『あら野』の連作模様」『芭蕉連作詩篇の研究 日本連作詩歌史序説』（一）
○復本一郎「六、かるみ―『俳諧深川』の世界」『芭蕉の美意識』一二二～一四〇頁（四）
○三浦隆「蕉風俳諧に於ける『軽み』の顕われの一考察―脇句の留め方より見たる―」語文48（日本大学）（六）
○阿部完市「『軽み』のこと」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○阿部青鞋「軽み論の総括」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○岡井省二「『軽み』私感―〝軽み〟論の総括」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○岡田日郎「再説・現代の『軽み』小考」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○斉藤美規「不易の場」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○竹中宏「かるみ遠近―かりにも古人の涎をなむる事なかれ／土芳『赤双紙』―」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○坪内稔典「差異性の輝やき」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○広瀬直人「〝軽み〟の側面」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○三橋敏雄「私観『軽み』」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○森田峠「芭蕉と現代の軽み」俳句研究46(6)（特集・「軽み」論の総括）（六）
○阿部正美『あら野』雁がねの巻の意義―貞享期の軽みについて―」国語と国文学56(7)（七）／『芭蕉俳諧の展望 付芭蕉連句抄総索引』平成2年
○今泉宇涯「軽みについて」俳句28(8)（特集・近世秀句鑑賞）（七）
○雲英末雄「『猿蓑』の撰集―その理想と現実―」国文学（十）／『元禄京都俳壇研究』（昭和60年）改題「『猿蓑』について」

○尾形仂・金子兜太・目崎徳衛「（協同討議）『軽み』をめぐって」国文学（十）

昭和55年（1980）

○目崎徳衛「芭蕉のうちなる西行」俳句（一）／『芭蕉のうちなる西行』（角川選書）平成3年

○久富哲雄「解説―『おくのほそ道』執筆の意図」『おくのほそ道全訳注』（講談社学術文庫）三四二～三四四頁（一）

○松原春代「『かるみ』考」愛知淑徳大学国語国文3（三）

○井本農一「『かるみ』の考察」俳句29(4)～(11)（四）～（十一）／『芭蕉と俳諧史の研究』（昭和59年）「芭蕉の『かるみ』の考察」

○尾形仂「〝軽み〟の原点」ユリイカ12(5)（特集・芭蕉）（五）／『俳句と俳諧』昭和56年

○宮本三郎「解説」『校註ひさご・猿蓑』（笠間書院）九頁・二一頁（五）

○尾形仂・大岡信「第五話・『軽み』へ」『エナジー対話第16号・芭蕉の時代』（エッソ・スタンダード石油株式会社広報部発行）（六）／『芭蕉の時代』（朝日新聞社、昭和56年）一五三～一八四頁

○三浦隆「連句に於ける芭蕉の花の句―『軽み』への推移―」語文50（日本大学）（六）

○四戸宗城「第七章、正風の確立と解脱―軽みへの到達―」『芭蕉俳諧における詩的表現形態の研究』（桜楓社）一三九～一五八頁（七）

◎山本健吉「Ⅱ、軽みについて」『俳句の本Ⅲ俳諧と俳句』（筑摩書房）（七）／『すばる』昭和49年3月号から掲載の四回分、『奥の細道』（講談社）平成元年

○伊沢元美「『軽み』と現代俳句」俳句29(10)（特集・近世の俳論）（九）

○富山奏「『あだ』とは別次元の『軽み』」春星（十）

○富山奏「芭蕉が『軽み』の作と自評した花見の句」春星（十一）

○富山奏「『軽み』の本質は高悟帰俗」春星（十二）

○尾形仂・松崎好男「前句付と軽み」『芭蕉必携』（別冊国文学No.8）（十二）

昭和56年（1981）

○富山奏「連句における『軽み』」春星（一）

○星野洋介「俳神をもたらすために―方法としての『軽み』」中世近世文学研究14（一）

○富山奏「連句にみる芭蕉晩年の芸境」春星（二）

○我妻恵美子「芭蕉の研究―〝かるみ〟試論」学習院大学国語国文学会誌24（二）

○目崎徳衛「いま俳句で何が問題か『軽み』をめぐって」国文学（二）

◎乾裕幸「『阿羅野』の時代―《正風体》の確立」『ことばの内なる芭蕉―あるいは芭蕉の言語と俳諧性』（未来社）（四）

◎乾裕幸「『ひさご』序説―《かかり》と《かるみ》」『ことばの内なる芭蕉―あるいは芭蕉の言語と俳諧性』（未来社）（四）

◎乾裕幸「《取合せ》の論」『ことばの内なる芭蕉―あるいは芭蕉の言語と俳諧性』（未来社）（四）

○復本一郎　「『浅き砂川』考―『かるみ』享受の諸相」静岡大学人文学部・人文論文集32　（七）／『笑いと謎―俳諧から俳句へ―』（角川選書、昭和59年）、『本質論としての近世俳諧の研究』（昭和62年）「『浅き砂川』の意味」

○稲垣安伸　「『軽み』の論1」高知東高等学校紀要1　（十二）

昭和57年（1982）

○星野洋介　「『軽み』について」中世近世文学研究15　（一）

○田尻龍正　「芭蕉における『かるみ』について―その形成過程の考察」宮崎大学教育学部紀要・人文科学51　（三）／『芭蕉論集』昭和62年

○今栄蔵　「解説　芭蕉の発句―その芸境の展開」（新たなる転生―『おくの細道』から『猿蓑』へ）（庶民詩の創造―かるみの深化）『新潮日本古典集成芭蕉句集』（八）

○復本一郎　「かるみ」の項『総合芭蕉事典』（雄山閣）五四～五五頁（八）

○富山奏　「かるみ」『芭蕉講座』2（有精堂）（十一）

○伊藤博之　「風雅の誠・不易流行」『芭蕉講座』2（有精堂）（十一）／『西行・芭蕉の詩学』平成12年

○宮田俊彦　「其角の『軽み』」常磐学園短期大学研究紀要11　（十二）

○稲垣安伸　「『軽み』の論2―芸位論との関連において」高知日本文学研究20　（十二）

昭和58年（1983）

○安達昇　「芭蕉の軽みへの旅―奥の細道を辿って」花実60　（三）

○萩原恭男　「撰集論9　炭俵」『芭蕉講座』3（有精堂）（四）

○萩原恭男　「撰集論10　続猿蓑」『芭蕉講座』3（有精堂）（四）

○田中善信　「撰集論7　ひさご」『芭蕉講座』3（有精堂）（四）

○森田蘭　「撰集論8　猿蓑」『芭蕉講座』3（有精堂）（四）

○雲英末雄　「元禄俳壇と芭蕉」『芭蕉講座』3（有精堂）（四）／『元禄京都俳壇研究』昭和60年

○服部直子　「芭蕉連句におけるいわゆる『名所』の付合」名古屋大学国語国文学52　（七）／続稿に「芭蕉連句にみえる『名所』ならざる地名の付合、及び定座と地名句の関係」『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』（名古屋大学出版会）昭和59年

○大谷篤蔵　「『牛流す』の巻」文林18（松蔭女子学院大学）（十一）／『芭蕉連句私解』（角川書店）平成6年

昭和59年（1984）

○堀信夫　「かるみ」の項『日本古典文学大辞典』（岩波書店）（一）

○三浦隆　「蕉風俳諧における『時雨』―『軽み』への推移―」日本大学人文科学研究所研究紀要29　（三）

◎復本一郎　「擬声語・擬態語と俳句」『笑いと謎―俳諧から俳句へ―』（角川選書）（八）

○笠間愛子　「歌仙『木のもとに』断想―その付合が語るもの―」文学研究60　（十一）

昭和60年（1985）

◎雲英末雄　「『猿蓑』について」『元禄京都俳壇研究』（勉誠社）

（四）
○坂東健雄「蕉門俳諧における『かるみ』志向の諸徴標に関する考察」日本文芸研究37(1)（関西学院大学）（四）
○島居清「撰集としての『猿蓑』論」ビブリア84（五）
○中野沙恵「かるみ」国文学（特集・古典文学のキーワード）（九）

昭和61年（1986）
○阿部正美「軽みへの入口―『深川』の俳諧について―」専修国文38（一）／『芭蕉俳諧の展望 付芭蕉連句抄総索引』平成2年
○復本一郎「かるみ」「俗談平話」の項『近世文学研究事典』（岡本勝・雲英末雄編、桜楓社）（四）／第二版（平成5年）参考文献追補・『新版』（おうふう、平成18年）
○坂東健雄「芭蕉俳諧における『かるみ』に関する考察」人文論究36(1)（関西学院大学）（五）
○東明雅・杉内徒司・大畑憲治（編）「軽み」の項『連句辞典』（東京堂出版）の用語篇二五～二六頁（六）
○稲垣安伸「『軽み』の論3―世阿弥の『安位』」高知日本文学研究24（十二）
○大谷篤蔵「『夕顔や』の巻」文林21（松蔭女子学院大学）（十二）／『芭蕉連句私解』平成6年

昭和62年（1987）
○引地冬樹「俳句における笑い4―芭蕉の『かるみ』の世界」かびれ（四）
◎復本一郎「『浅き砂川』の意味」『本質論としての近世俳諧の研究』（風間書房）（四）
○阿部正美「軽みの時代（上）―元禄六年の芭蕉俳諧―」専修国文40（七）／『芭蕉俳諧の展望 付芭蕉連句抄総索引』平成2年
○山下一海「先人の言葉21・俗語を正す」俳句研究54(9)（九）
○小松崎爽青「芭蕉の俳諧理念さび・しをり・ほそみ・かるみ」かびれ（十一）

昭和63年（1988）
○山下一海「先人の言葉28・季の取り合はせ」俳句研究55(4)（四）
○阿部正美「軽みの時代（中）―元禄七年の深川在庵中の芭蕉俳諧―」専修国文42（七）／『芭蕉俳諧の展望 付芭蕉連句抄総索引』平成2年
○山下一海「先人の言葉31・取り合はせ物」俳句研究55(7)（七）
○高橋英夫「生命の『軽み』」群像48(8)（八）／『ミクロコスモス―松尾芭蕉に向って』（平成元年）二〇七～二三三頁

平成元年（1989）
◎山本健吉「『軽み』の論」『奥の細道』（講談社）（二）
○阿部正美「軽みの時代（下）―最後の旅に於ける芭蕉俳諧―」専修国文43（二）／『芭蕉俳諧の展望 付芭蕉連句抄総索引』平成2年
○上野洋三「春雨・蜂の巣・蜘蛛の囲」女子大文学・国文篇40（三）／『元禄和歌史の基礎構築』平成15年
○乾裕幸「〈軽み〉と老い」『校本芭蕉全集』5「月報」（富士見書房）（三）

○暉峻康隆「芭蕉晩年の理念と俳風」俳句研究56(4)（特集・「奥の細道」前後）（四）
○今栄蔵「11・庶民詩への成熟」『芭蕉 その生涯と芸術』（日本放送出版協会）（九）
○高橋悦男「『軽身』への旅―『おくのほそ道』私考」早稲田人文自然科学研究36（十）
○稲垣安伸「『軽み』の論4―芭蕉の『道建立』」高知日本文学研究27（十二）

平成2年（1990）

○上野洋三「七部集の表現と俳言」・「続猿蓑」〈意義〉『新日本古典文学大系 芭蕉七部集』六一六～六二一頁・四五六頁（三）
○白石悌三「ひさご」〈意義〉・「猿蓑」〈意義〉・「炭俵」〈意義〉『新日本古典文学大系 芭蕉七部集』二二八頁・二五八頁・三五八頁（三）
○白石悌三「こぼれ炭―『炭俵』注釈余談―」江戸文学3（ぺりかん社）（六）
○上野洋三「野坡から見える芭蕉」『上方の文化 芭蕉観のいろいろ』（上方文庫10、和泉書院）（十一）
○雲英末雄「晩年 江戸の生活―かるみへの志向（元禄四年～元禄七年）」『新潮古典文学アルバム18 松尾芭蕉』八四～九一頁（十一）

平成3年（1991）

○堀切実「芭蕉晩年の『かるみ』の風に同調しない門人が生じたのは何故か」国文学（特集・芭蕉の謎／蕪村の謎―いま何が論点か）（十一）
○目崎徳衛「『汁も膾も』をめぐって」『校本芭蕉全集』11「月報」（富士見書房）（十一）

平成4年（1992）

○星野昌彦「軽み論考」景象12（九）
○大内初夫「『炭俵』『続猿蓑』の世界」『元禄文学の開花Ⅱ 芭蕉と元禄の俳諧』（講座元禄の文学3、勉誠社）（十）
○復本一郎「かるみの論―惟然を追って―」『元禄文学の開花Ⅱ 芭蕉と元禄の俳諧』（講座元禄の文学3、勉誠社）（十）
○星野昌彦「軽みへの道―蕉風樹立まで」景象13（十二）
○下垣内和人「『軽み』と『取り合わせ』」（近世秀句鑑賞）俳句研究59（十二）

平成5年（1993）

○高橋英夫「第七章、西行以後」『西行』（岩波新書）二一八～二三三頁（動と静と）（四）
○大畑健治「〈俗談平話〉を正す」獅子吼（六）

平成6年（1994）

○谷沢永一「『軽み』に至る道」『没後三百年芭蕉を〈読む〉』（山形新聞社編集局編、三一書房）（一）
○光田和伸「かるみ」国文学（特集・芭蕉を読むための研究事典）七九頁（三）
○雲英末雄「解説」『新日本古典文学大系 元禄俳諧集』（十）

平成7年（1995）

○中尾青宵　「軽みの次」獅子吼79(3)　(三)
○尾形仂　「かるみ」の項『俳文学大辞典』(角川書店)　(十)／『普及版』(角川学芸出版)　平成20年
○市川通雄　「芭蕉とその俳風の変遷」文学研究82　(十一)

平成8年(1996)

○志田延義　「解説—四、『おくのほそ道』俳文の軽み」『俳文紀行おくのほそ道論釈』(武蔵野書院)　二〇〜二三頁　(八)
○阿部正美　「初期軽みの一面—元禄三年に於ける芭蕉の表現の一傾向—」専修国文59　(八)
○諏訪春雄　「近世文学の術語」国語と国文学　(十一)／『江戸文学の方法』(勉誠社、平成9年)改題「江戸文学の術語」
◎廣末保　「風流と俳諧性」『著作集』1(元禄文学研究)　(十一)
○目崎徳衛・清水基吉・山下一海　「特別鼎談・軽みと老い—死生観を語る」俳句45(11)　一九二〜一九四頁(老いは「軽み」に尽きる)　(十一)

平成9年(1997)

○中嶋真弓　「芭蕉『かるみ』論への一考察」上越教育大学国語研究11　(二)
◎諏訪春雄　「江戸文学の術語」『江戸文学の方法』(勉誠社)　七一〜七二頁　(四)
○森山昌枝　「『芭蕉自筆奥の細道』ノート—〝かるみ〟への道をさぐって」文学と教育177(文学教育研究者集団)　(六)
○尾形仂　「第一章—四、〝軽み〟への歩み」『「おくのほそ道」を語る』(角川選書)　七三〜九七頁　(六)
○森山昌枝　「『芭蕉自筆奥の細道』ノート[続]—〝かるみ〟への道をさぐって」文学と教育178(文学教育研究者集団)　(八)
○堀切実　「解説—三、連句編2—(3)付合の手法」『新編日本古典文学全集　松尾芭蕉集②』六一三〜六一四頁　(九)
○櫻井武次郎　「第三部—1、〈軽み〉を目指した歌仙」『芭蕉自筆「奥の細道」の顛末』(PHP研究所)　一九〇〜一九一頁　(十)

平成10年(1998)

○宇城由文　「『ひさご』試論」『日本近世文学研究の新領域』(思文閣出版)　二二五〜二三七頁　(五)

平成11年(1999)

○成川武夫　「七章、『軽み』の新風とその行方」『芭蕉とユーモア　俳諧性の哲学』(玉川大学出版部)　三一八〜三六六頁　(九)

平成12年(2000)

○三ツ石友昭　「『かるみ』の論」日本文学研究51(4)　(三)
○荒川有史　「芭蕉俳論を読む〈その十〉—〈軽み〉への道程(山本健吉)」文学と教育188・189(文学教育研究者集団)　(八)
○村松紅花　「芭蕉の『かるみ』とは何だったのか」俳句現代(大特集・芭蕉)　(八)

平成13年(2001)

○尾形仂　「総説」『おくのほそ道評釈』(日本古典評釈全注釈叢書、角川書店)　九〜十二頁　(五)
○藤原マリ子　「『奥の細道』と『軽み』の理念」俳句界59(北溟社)

（特集・芭蕉『奥の細道』再発見）（十）

平成14年（2002）

○尾形仂（編）「第三部　芭蕉語彙辞典」「かるみ［軽み］」の項『芭蕉ハンドブック』（三省堂）一九〇頁（二）

○永田英理「蕉風連句における『起情』の手法をめぐって」連歌俳諧研究102（二）／『蕉風俳論の付合文芸史的研究』平成19年

平成15年（2003）

○本間正幸「『別座鋪』の笑い―蕉門における『笑い』の変遷の中で」文叢37（成城学園高校）（三）

○櫻井武次郎（執筆代表）「不易流行」～「『続猿蓑』の編集」『上野市史　芭蕉編』上野市（現伊賀市）編（第三章「元禄時代」の第二・三・四節）二三〇～三四二頁（三）／CD―ROM版の付録（同内容）

平成16年（2004）

○稲垣安伸（作品案内）「第一章　俳諧撰集『ひさご』『猿蓑』『炭俵』『続猿蓑』」『日本の作家100人松尾芭蕉―人と文学』（勉誠出版）（一）

○永田英理「詩人芭蕉、感性の覚醒―表現としての『触覚』のはたらき―」国語と国文学（七）

○堀切実「俳諧随想　取合せと掛合せ」俳句研究71(9)（八）

平成17年（2005）

○高柳克弘「芭蕉の一物仕立ての句のイメージ分析―取合せ論の再検討」早稲田大学大学院教育学研究科紀要・別冊13(1)（九）

平成18年（2006）

○竹内千代子「『炭俵』序論―芭蕉の〈山路〉―」アート・リサーチ Vol.6（立命館大学アート・リサーチセンター）（三）

○堀切実「一〇、俳風の形成―『かるみ』から『姿先情後』へ」『俳聖芭蕉と俳魔支考』（角川選書）（四）

○千野浩一「取り合わせ―『趣向』『句作り』の論をめぐって」江戸文学34（ぺりかん社）（特集・江戸文学のスピリッツ）（六）

平成19年（2007）

○齋藤孝「『奥の細道』の旅の連句と『軽み』」愛知淑徳大学国語国文30（三）

平成20年（2008）

○齋藤孝「『軽み』の目指すもの―景気と光」愛知淑徳大学国語国文31（三）

○堀切実「取合せ論の史的考察―その本質と根拠」連歌俳諧研究105（九）

○佐藤勝明「『諛諧畧題林』の紹介と考察―芭蕉没後の〈かるみ〉を考える」平成二十年度俳文学会第六十回全国大会プログラム・研究発表要旨（十）

とりあげた文献数は、現代俳句からの考察も含めて、平成二〇年までの延べ三二八、遺漏も免れないが、昭和初期から八〇年間で約三〇〇件にのぼる「軽み」に関する発言が蓄積されてきたとみてよいだろう。「かるみ」は『俳諧大辞典』『日本古典文学大辞典』『俳

文学大辞典』で立項されもし、さまざまな考察によって理解も深められてきた。

その一方で、

▽蕉風俳諧の究極的な美的理念なのか、あるいは蕉風展開史上における最終的な風調・句体なのか、はたまた芭蕉晩年における自由無礙の芸境芸位なのか、さらには造化に随い造化にかえる芭蕉の生き方や世界観の謂なのか、今日においても論者の説くところは区々として一致しない（堀信夫氏、昭和59年）。

▽芭蕉晩年の「境地」と解するか、「風体」と解するか、決着がついていない（復本一郎氏、昭和61年）。

▽創作のあり方と考えられるが、理念・理想なのか、技法・句体なのか、またその価値づけをめぐって議論が分かれる（光田和伸氏、平成6年）。

とあるように、具体的な定義となると個々の論者に委ねられ、常にその点において曖昧な面を抱えこんだまま研究は現在に至る。蕉風俳諧の中でも厄介な課題の一つだと思う。

つまり、『俳文学大辞典』等の説明は、標準的理解として尊重すべきものだが、研究の面からいえば、未解決・未決着の状態が継続していると認識しておく必要がある。

確かに曖昧な課題ながら、先学の様々な方面からの検証によって、展望が拓かれて来なかったわけではない。たとえば、軽み論の一部にみられた抽象論に流れる傾向を避けて、表現面から分析してみるのも一つの試みだろう。ただし、門人らを通しての「軽み」関連資料は展望を拓く切っ掛けとなったが、これらに全面依拠する研究の方向については、

▽門人らの個に密着した芭蕉の示教に基づく理論であるゆえに、門人らの筆録から帰納的に結論を抽出しようとしても、個人向けという特殊性を切り離した俳論では、芭蕉の真意を違える恣意的な曲解に陥る危険性がある（富山奏氏の記述主旨、昭和53年）。

と述べておられる警鐘にも耳を傾けねばならない。

また、『おくのほそ道』の執筆時期との重複が意識され出したのも、新たな視点といえるだろう。

こうした先学の種々の論考を経て、成果のあがったもの、あがらなかったものを俯瞰してみるに、次の三点については、既に了解が得られていると思われる。

一、「軽み」は、芭蕉一代の理念や芸境の問題に限られたものではないこと。

一、芭蕉の「軽み」は、門人の説く表現論や付合技巧を通しての理解だけでは不十分であること。

一、初期の研究で確認されていたごとく、「軽み」の根本は「三句のわたり」の理想のいき方であること。

右を鑑みてさらに贅言を弄すれば、阿部正美氏の歩まれてきたような作品研究の充実を図るとともに、昭和52年4月の「国文学」で企画された試み―即ち「撰集論」の視点に立ち戻ってみることが、今後の重要な課題となるのではないだろうか。

以上が、今回、文献を概観した私見である。

＊（上）の訂正　33頁上段6行目　酒堂→洒、同14行目　頃→項

＊（上）の補足

昭和18年（1943）

○頴原退蔵　「『軽み』の真義」……『著作集』10、『芭蕉研究論稿集成』2（平成11年）

○能勢朝次　「芭蕉の俳諧精神」芭蕉研究2（十二）／『著作集』9

○能勢朝次　「帰俗の軽み」……（平成11年）、『著作集』9

昭和27年（1952）

○山崎喜好　「軽み」俳句（十一）／『芭蕉研究論稿集成』3（平成11年）

昭和23年（1948）

○能勢朝次　「軽み」……（二）／『著作集』9

昭和30年（1955）

○尾形仂　「蕉風と元禄俳壇」……『俳諧史論考』昭和52年、『芭蕉講座』4（創元社、昭和31年）「芭蕉と元禄俳壇」はほぼ同内容、『江戸人物讀本②　松尾芭蕉』（楠元六男編、ぺりかん社）平成2年

昭和31年（1956）

◎尾形仂　「芭蕉と元禄俳壇」『芭蕉講座』4（創元社）（三）

昭和34年（1959）

○福田真久　「文学と人間性」・「晩秋の孤影」真如（七・八）／『松尾芭蕉論―晩年の世界―』（教育出版センター、昭和46年）「第一章、晩年の句境」の一・二

昭和35年（1960）

○福田真久　「清浄の世界」真如（三）／『松尾芭蕉論―晩年の世界―』（教育出版センター、昭和46年）「第一章、晩年の句境」の九

昭和36年（1961）

○阿部喜三男　「八、晩年の江戸　軽み」『松尾芭蕉』（人物叢書、吉川弘文館）二〇二～二〇三頁（七）／『新装版』昭和61年

昭和42年（1967）

○宮本三郎・今栄蔵　「（作家研究篇）一一、晩年の江戸　江戸蕉門と軽み」『松尾芭蕉』（俳句シリーズ人と作品1、桜楓社）（十）／『新訂』昭和54年

昭和45年（1970）

○宮本三郎　「連句の美学」……／『蕉風俳諧論考』昭和49年、『江戸人物讀本②　松尾芭蕉』（楠元六男編、ぺりかん社）平成2年

昭和46年（1971）

○堀切実　「取合せ論の検討」……／『蕉風俳論の研究―支考を中心に―』昭和57年、『江戸人物讀本②　松尾芭蕉』（楠元六男編、ぺりかん社）平成2年

昭和48年（1973）

○八亀師勝　「『軽み』と〝くつろぎ〟……（七）／『蕉風俳諧における座の意識』（昭和49年）の第二章第三節「『くつろぎ』と『軽み』」

○高橋庄次　「『あら野』をめぐる問題」文学（十一）／『芭蕉連作詩篇の研究　日本連作詩歌史序説』（笠間書院）昭和54年

昭和49年（1974）

○山本健吉　「『軽み』の論」すばる15～18・20～22・24（計八回掲

載）（三）～昭和51年六月／『奥の細道』（講談社、平成元年）は全八回分、『俳句の本Ⅲ俳諧と俳句』（筑摩書房、昭和55年）と『全集』8は一～四回分を掲載

○山本健吉・尾形仂・大岡信　「座談会《日本文学通史への試み》芭蕉―その俳諧形式の特質」群像　（四）

◎八亀師勝　「『くつろぎ』と『軽み』」（第二章第三節）・「許六の『くつろぎ』観」（第二章第五節）『蕉風俳諧における座の意識』（研究叢書23、桜楓社）一二二～一三三頁・一四五～一五四頁（十一）